



JIC インフォメーション

第218号 2022 年 1 月 20 日 臨時号
年 4 回 1・4・7・10 月の 10 日発行
1 部 500 円

発行所: JIC国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<https://www.jic-web.co.jp>

東京オフィス: 〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-10-5 岡田ビル 6 階 TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0012 大阪市中央区谷町 2-7-4 谷町スリースリースビル 7 階 TEL: 06-6944-2341

はりねずみのジェーニャ



ロシア・旧ソ連 国際交流誌



<https://www.jic-web.co.jp>

(写真) 左上2枚＝アニメ「マーシャとくま」(4頁)、右上＝ロシア文学と音楽のつどい(17頁)、左下・右下＝マトリョーシカとロシア雑貨の魅力(10頁)

《日ロ交流情報》

2021 年秋、各地の日ロ交流活動……………2P

《JIC イベント報告》

アニメ「マーシャとくま」から学ぶロシア文化……………稲塚 俊介……………4P

ロシア留学セミナー「現地最新事情」……………小西 章子……………6P

《活動紹介》 湘南ロシア倶楽部……………菅原 信夫……………7P

《本の紹介》

黒田龍之助先生の 2 冊の本……………岡本 健裕……………8P

《講演録》 大阪日ロ協会オンライン講演会

「マトリョーシカとロシア雑貨の魅力」……………小我野 明子……………10P

《講演録》 とよなか日ロ交流協会準備会

「ドストエフスキーと『カラマーゾフの兄弟』」……………木寺 律子……………17P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

日ロ交流情報

昨年はワクチン接種の進展とともに秋口から感染者数が急減し、社会全体に「ようやく正常化に向かうのではないか」という気分が生まれ、年末までの間に各地で息を吹き返したように様々なイベントが行われました。とはいえ、コロナの影響で中止や延期になったイベントも多く、2020-21 年に設定されていた『日露地域・姉妹都市交流年』の交流事業は 2022 年も継続して行われることになりました。

以下、昨年秋に各地の交流団体が取り組んだ日ロ交流活動をご紹介します。年明けから再び新型コロナ「第 6 波」が急速に拡大してきました。またしばらくイベントがやりにくくなりますが、いずれ必ず来る「コロナ後」を見据えて、JIC も工夫しながら活動を継続したいと思います。(編集部)



10 月 31 日／大阪府豊中市

ドストエフスキー生誕 200 周年記念 「ロシア文学と音楽のつどい」

10 月 31 日、大阪の豊中市でロシア文学の巨人ドストエフスキーの生誕 200 周年を記念する「ロシア文学と音楽のつどい」が開催されました(主催;とよなか日ロ交流協会準備会)。参加者は約 70 名。京都産業大学の木寺律子准教授が「ドストエフスキーと『カラマーゾフの兄弟』」と題して講演し、豊中市出身のピアニスト小塩真愛さんがムソルグスキーの組曲『展覧会の絵』を演奏しました。豊中市には在大阪ロシア総領事館があり、主催者の木村真・豊中市議会議員は「せっかくロシアの総領事館があるのだから、地の利を生かして今後もしっかり市民交流を進めたい」と決意を語っていました。
*木寺律子先生の講演録を本号 17 頁に掲載しています。

11 月 7 日／神奈川県鎌倉市

かまくら国際交流フェスティバル 2021 湘南ロシア倶楽部が来店

11 月 7 日、鎌倉市の高德院(鎌倉大仏)にて「かまくら国際交流フェスティバル 2021」が開催され、鎌倉市内の多くの国際交流団体とともに『湘南ロシア倶楽部』(渡辺雅司・代表理事)も出店し、ロシア紹介などの活動を行いました。

湘南ロシア倶楽部は 2019 年 4 月に鎌倉に住むロシア関係者によって設立され、ロシア料理やロシア語の勉強会、映画鑑賞などの活動を行っています。コロナ明けにはロシア極東への交流旅行を企画予定です。

フェスティバルにはジェーアイシー旅行センターも誘われて参加し、ロシア倶楽部の屋台でロシアのシロップ「スビテン」の販売を一緒にさせていただきました(おかげさまで、持ち込んだスビテンは完売! ありがとうございます)。

*7 頁に湘南ロシア倶楽部の紹介記事を掲載しています。



鎌倉大仏殿(高德院)境内で開催された「かまくら国際交流フェスティバル」に参加した湘南ロシア倶楽部の皆さん

11 月 20 日／大阪日ロ協会

小我野明子さんを講師にオンライン講演会 「マトリョーシカとロシア雑貨の魅力」

11 月 20 日に大阪日ロ協会(藤本和貴夫・理事長)のオンライン講演会が開催されました。講師は奈良市内でロシア雑貨店を営む小我野明子さん。小我野さんが撮り溜めたたくさんの写真とともに「マトリョーシカとロシア雑貨の魅力」が紹介されました。マトリョーシカといっても工場生産のお土産用から作家の手になる芸術品までいろいろあり、作家によって違ったかわいらしさがあることなど、軽妙な語り口で楽しいお話を聞くことができました。また、後半では小我野さんが 1 月に出版される本「ロシアのチョコレート包み紙」の



紹介があり、ロシアとソ連時代のチョコレート包み紙のデザインからロシア社会の文化的空気を読み取れることなども教えていただきました。

*本号 10 頁に小我野さんの講演録を掲載しています。

11 月 30 日／日本ロシア協会

ロシアを知るセミナー2021

「ロシアの村～息づく習慣風俗」



11 月 30 日、東京の衆議院第一議員会館で日本ロシア協会（高村正彦・会長）のロシアを知るセミナーが久しぶりに開催されました。セミナーでは、ロシア連邦文化科学協力庁在日代表のイーゴリ・チトフ氏（ロシア大使館参事官）が「ロシアの村～息づく風俗習慣」

と題して講演を行いました。

現在のロシアの人口は日本より少し多い 1 億 4600 万人ですが、1917 年のロシア革命前に 8 割を超えていた農村人口は 1960 年前後に都市人口と逆転し、現在では 25%程度に減っています。日本ほどではありませんが、ここ 100 年間にロシアでもまた都市化が大幅に進みました。今やロシア人の大半は都市生活を送っているわけですが、ロシア人のメンタリティには「ロシアの村」の生活の記憶と習慣が色濃く残っていて、農村生活を知らなければロシア人を本当に知ったとは言えないとチトフ氏は言います。

講演では、ロシア人の伝統と生活に影響を与える寒い気候に始まって、農地や森や川で採れる食べ物（野菜、果物、木の実、きのこ、魚など）、民家の構造や暖房（ペチカ）、バーニャの習慣、それにロシア正教のお祭りなど、「ロシアの村」のさまざまな生活文化が、豊富な写真スライドとともに紹介されました。

12 月 23 日／ロシア文化フェスティバル

「日本の中のロシア」ミュージアムを紹介する演奏会

2021 忘年コンサート「映像と音楽のひととき」

「新型コロナウイルスとのたたかひに負けないで、音楽・芸術を守り、日本とロシアとの文化交流と友好を促進しよう」と、12 月 23 日にロシア文化フェスティバルの「2021 忘年コンサート」が東京・浜離宮朝日ホールにて開催されました。

このコンサートは、インターネット・ミュージアム「日本の中のロシア」で使われている楽曲を生演奏で楽しむもので、日本人、ロシア人の多くの歌手や演奏家が参加しました。

12 月 10 日／京都市

京都市キエフ市姉妹都市提携50周年

日本からウクライナへ祈りを込めて

12 月 10 日（金）、京都市国際交流会館にて、ウクライナのキエフ市と京都市の姉妹都市提携 50 周年を記念するイベントが開催されました。参加者は約 70 名。まずは門川大作・京都市長とセルギー・コルスンスキー駐日大使が挨拶。大使からは 50 周年を記念してウクライナから贈られた栗の木が宝ヶ池公園に植樹されたことが報告されました。

記念イベントでは、ウクライナその他の都市で「壁画プロジェクト」を行っているトータルペインターのミヤザキケンスケさんが、ステージ上で壁画のライブペイントを開始。それと同時進行で、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の職員として 2016 年から 3 年間ウクライナに滞在した千田悦子さんのスピーチやパネルディスカッションがあり、後半はバイオリンとピアノのミニコンサート、和太鼓とウクライナの民族楽器バンドウラの演奏などが行われました。

その間にステージでは壁画が描き込まれ、明るい虹のかかった空の下で美しい町の上を飛行機が飛ぶ、日本とウクライナの間のかげはしを象徴するような壁画が完成しました。

ささやかなイベントでしたがアイデア豊富で和気あいあいとした雰囲気の交流会でした。

* * *

なお、ここで紹介した記事以外にも、函館日ロ親善協会のクリスマスパーティ（12 月 9 日）、新潟での「ロシアンクリスマス展」（12 月 2 日～12 日、イオンモール新潟南）、福井県日・ロ親善協会と福井ロシア語教室の主催によるロシア語公開講座（12 月 21 日）、兵庫県洲本市・クロンシュタット姉妹都市提携 20 周年記念行事（11 月 14 日）など、各地から交流情報が届いています。コロナ下でも多くの団体が、地道な交流活動に取り組んでいます。

JICオンラインイベントの報告

JIC は昨年 5 回のオンラインイベントを行いました。3 月 13 日の「行った気になるウラジオストクとハバロフスク」に始まって、4 月、8 月、12 月とオンラインツアーを企画し、その度に多くの方々に参加していただきましたが、12 月 18 日に開催した「アニメ『マーシャとくま』(Маши и Медведь)から学ぶロシア」はとりわけ印象深いイベントとなりました。

以下、担当の稲塚俊介(JIC 東京)から「マーシャとくま」へのアニメ愛に満ちた報告です。(編集部)



ついに日本上陸！ アニメ「マーシャとくま」から学ぶロシア文化

稲塚 俊介(JIC東京/アウトバウンド部)

昨年 12 月 18 日(土)に行われた JIC のオンラインイベント「アニメ『マーシャとくま』から学ぶロシア」について報告します。

コロナウイルス拡大で海外旅行が制限されて以降、JIC が行ったオンラインイベントは今回で第 5 回目となります。旅行ができない鬱憤を晴らすために、これまでは主に観光地やマトリョーシカの産地を巡るオンラインツアーを手がけてきました。しかし、今回は主旨を一変してロシアアニメに焦点を当てました。「ロシアアニメ」と言えば日本でも人気の出たチェブラーシュカや Ну, погоди! など想像されるかもしれませんが、実は現代ロシアにも優れたアニメがあるのです。それが本イベントのテーマである「マーシャとくま」です。ロシア語タイトルは「Маши и Медведь」。ロシアの街中ではグッズも多く出回っている、すでにご存知の方もいると思いますが、簡単にアニメについてご説明します。

「マーシャとくま」はいたずら好きの女の子「マーシャ」と元サーカス団員の「くま」の友情を描いた作品です。2009 年からロシアでテレビ放映が始まり、現在第 5 シーズン放送中という大ヒット作品となっています。その人気は世界中に広まり、2019 年には第 17 話「Маши плюс Каша」が再生回数 33 億回を突破し、「YouTube における最も視聴されたアニメ映像」としてギネス記録に認定されました。そして 2021 年、ついに日本においても地上波放送開始(テレビ東京)、日本語公式 YouTube サイトオープンなどメディア展開が始まりました。

なぜ「マーシャとくま」をテーマに選んだか？

「マーシャとくま」がロシア生まれの世界的アニメということはお分かりいただけたと思いますが、なぜ旅行会社のオ

ンラインイベントでテーマになったのでしょうか。アニメ全般ではなく、なぜこの作品だけをメインに据えたのか。それはイベント企画者(つまり私)が「アニメ好き」だったからに外なりません。私は現在 28 歳。入社 4 年目で、JIC の中で年齢・経験共に一番の若輩者です。そんな私が 2021 年末のイベント担当者に抜擢され、自分なりのカラーを出そうとした結果辿り着いたのが「マーシャとくま」でした。私自身は特にロシアアニメに造詣が深いわけでもなく、単なるアニメ好きで、JIC ではセーラーMoonが好き(ジュピター推し)としか認知されていないと思います(笑)。そんなセーラー戦士である私がある朝テレビをつけるとなんと「マーシャとくま」がテレビ放送されていました。作品については前から知っていましたが、「遂に日本に来たか!」という感じで見てしまいました。そしてその時思いました。「視聴者はこれがロシアアニメということを知っているのだろうか」と。もちろん知っていなくても十分楽しめますが、ロシアの文化を理解していればもっと興味が出るのではと感じました。ということで「今度のオンラインイベントではマーシャとくまの魅力をjつてロシア文化を広めよう!」という結論に至りました。前述した通り 2021 年は「マーシャとくま」にとって日本への船出の年だったという背景もあり、タイミングとしてもベストな時期でした。

イベント内容をどうしよう？

テーマを「マーシャとくま」に決めたところで、イベント内容をどうするのが最大の課題でした。なにしろ 1 つのアニメを 2 時間近くオンラインで紹介した経験はありません。そんなものはアニメ好きな私でも見たことがありません。加えて、日本における作品の認知度が未知数だったこともあり、悩みました。アニメが持つ本来の面白さを損なうことなく、作品の中に散りばめられた豊かなロシア文化を楽しく伝えることができるか。このことを常に念頭に置きながら内容を固めていった結果、アニメ 3 本を選択し各ストーリーに秘められたロシア文化を紹介していくことにしました。さらに、制作会社 AnniMacord 社の芸術監督、音響監督(兼くまの声優)のインタビューや制作現場の映像も用意しました。ここでは

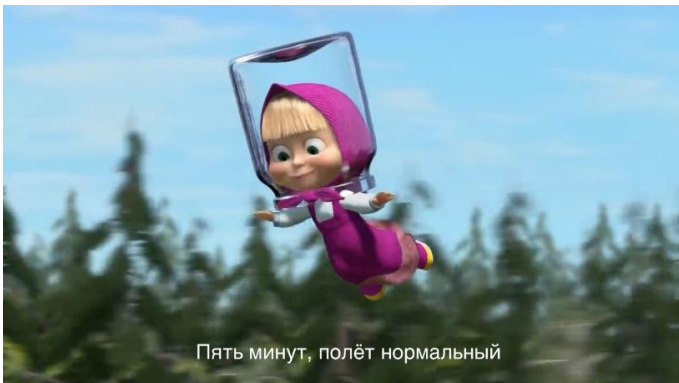
イベント内で解説した「ジャムの日」について紹介します。

『ジャムの日』じつは『ヴァレーニエの日』

第 1 シーズン第 6 話「День варенья」(邦題は「ジャムの日」)のストーリーを話すと——ジャム作りをしていたくまの元にマーシャが現れ、いたずらをした拍子にジャムを台無しにしてしまいます。怒ったくまは家を出てしまい、罪悪感を抱いたマーシャはくまのためにジャムを作るのですが、さてどんなジャムができるのでしょうか、…。

ここで、まずはタイトルに注目です。邦題では「ジャムの日」ですが、原題は「День варенья」、直訳すると「ヴァレーニエの日」となります。ジャムとヴァレーニエは似ていますが、厳密には異なります。ヴァレーニエがジャムと比較して違うポイントは、①弱火で煮込む、②具材がきちんと形を残している、③サラサラしている、などです。

マーシャは歌いながら、ベリー類だけでなくニンジン、トマトや松ぼっくりなど、好きなものを入れていきます。ヴァレーニエの具材は極論すると何でも OK なのです。一般的な日本人の感覚からすると、マーシャが野菜の入ったふざけたジャムを作っている光景に見えるこのストーリーも、ヴァレーニエの存在を知っていれば全く印象は異なりますよね。と言ったように、ロシア知識を持たずにただアニメを見てみると見落とししたり誤解したりするポイントが沢山あるということをイベントでは紹介しました。



しかし、時間の制約から紹介しきれなかった点が多くあったことが悔やまれます。私も偉そうに解説していますが、ソ連時代のパロディは全く分かりませんでした(そもそも私が生まれた頃にはソ連はもう存在していませんでした)。例えば、これはイベント内で解説しませんでしたでしたが、マーシャが空の瓶に頭を入れて飛んでいる時に「Пять минут, полёт нормальный」と言います。このセリフは 1961 年 4 月 12 日、人類初の宇宙飛行を果たしたユーリー・ガガーリンが宇宙船内で地球と交信したときに言ったものです。ただし、これはロシア語の一般慣用句としても使われており、「今のところ OK」という意味です。ガガーリンの名言と言え「地球は青かった」や「Поехали(さあ行こう)」などがよく知られていますが、マーシャに新たな名言を教えてもらいました。感心してしまうのは、この台詞の前にマーシャが瓶を被って「Я космонавт (私は宇宙飛行士)」と前置きをしている点で

す。「今のところ OK」という意味の慣用句だけでは言葉そのままですが、「宇宙飛行士」という単語でガガーリンを連想させるあたりが見事です。

マーシャはいったい何歳なんだ？(笑)

「マーシャとくま」3つの魅力

イベントでは上記のようなことをあれこれ話していたらあっという間に時間が経ってしまいました。企画当初は数人しか参加者がいないのではという不安もありましたが、当日は 50 人以上の方々に参加いただきました。多くの人が「マーシャとくま」に興味を持ってきて嬉しかったです。かく言う私自身、調べているうちにどんどん作品への愛が深まってきました。

私が考える「マーシャとくま」の魅力は次の 3 つにまとめることができます。

① ロシア語が分からなくても楽しめる！

これは一度でも作品を見たことがある人なら分かると思います。台詞と言っても、マーシャが喋る言葉は基本的に短いので、話の内容は十分理解できます。むしろ簡単に使える単語も多いので、アニメを見てロシア語に抵抗がなくなってくればこれを機にロシア語の勉強を始めるのもありかもです。

② ロシア・ソ連文化が盛り沢山！

先に述べたヴァレーニエやガガーリンの台詞などは氷山の一角に過ぎません。掘っても、掘っても、話のネタが出てくる非常に深い作品となっています。ただし、フレーズだけだとなかなか細かい背景まで辿り着けないので、ロシア人の知り合いに聞くか、情報サイト Fandom の「Маша и Медведь Вики」を参照するといいいと思います。

③ 挿入歌が素晴らしい！

これは完全に好みの問題ですが、とにかく歌が良すぎる！この作品の BGM や挿入歌などすべてを手掛けているのは Василий Богатырёв (Vasily Bogatyrev) という男性アーティストです。とても可愛さがあってアニメのイメージにピッタリの曲が特徴です。「ジャムの日」の挿入歌も素晴らしく、私はロシア語歌詞を完コピするほど好きです。

このイベント報告ではオンラインイベントで紹介しきれなかったネタをできるだけ沢山盛り込もうとしたのですが、結果的には紙幅の関係上ほとんど書き切れませんでした(笑)。しかし、正直ここまでのめり込むとは自分自身でも想像していませんでした。オンラインイベントを JIC のオフィスで終えた後、帰りの電車でもスマホでマーシャを見ていたくらいですからね、よっぽどですよ(笑)。

「マーシャとくま」を通じて少しでもロシアの良さを伝えようと軽い気持ちで始めましたが、これで終わるには勿体ないくらい熱量が余っていますので、なにか次に繋がるものを再び提供出来ればと考えています。その日までアニメを見ながら作品への愛を深めて待っててください！

JICロシア語留学セミナー

コロナ下のロシア語留学 ～最新の事情を現地から配信

小西 章子 (JIC 大阪/アウトバウンド部)

JIC では、2021 年 12 月 3 日 (金) にロシア語留学オンラインセミナーを開催しました。1 年前につづき 2 度目の開催でしたが、日本国内での新型コロナ感染状況が落ち着いてきたこともあり、昨年同様 70 名近い方にご参加いただきました。ありがとうございました。

今回のテーマは「コロナ下のロシア語留学～最新の事情を現地から配信」。新型コロナの影響が長引く中、実際にロシア語留学は可能なのか、留学先によって受け入れに違いがあるのか、対面授業を受けられるのかなど、留学そのものの現状はもちろんのこと、日本、ロシア、ベラルーシの出入国のルール、各都市の新型コロナ感染状況や生活の様子、現地で特に気をつけるべきこと、事前に準備しておいた方がよいことなど、これから留学やロシア渡航を考えておられる方に向けて案内するセミナーとなりました。

セミナーでは、まず私から JIC のロシア語留学の紹介とコロナ下での渡航状況、ロシアと日本の出入国規制や大学の受け入れ態勢などを説明しました。コロナ下で留学を決断する基準は人によって異なります。出入国の手続きに煩わしさがあっても対面授業を受けられるなら是非行きたいという方もいれば、留学のために何度も PCR 検査を受ける必要がなくなるまで待ちたいという方もおられます。留学希望者にとって何が留学の障壁となっているか、また今後どのような点に着目しておけばよいか分かるように努めました。

JIC モスクワ事務所のチスティリーナ・イリーナからは、モスクワの現在の新型コロナ感染状況、ワクチン接種状況、生活上の規制について報告を行いました。モスクワの街の写真から実際の感染対策の様子なども見ていただき、モスクワ市民の新型コロナに対する考え方をうかがい知ることができたと思います。

サンクトペテルブルグ大学東洋学部の日本語教員・荒川好子さんは、サンクトペテルブルグでの新型コロナ対策や街の様子などとともに、ロシア語学習に活用できるロシアのニュースサイトの紹介、寒い冬を乗り切るための健康上のアドバイス、生活に欠かせない連絡手段など、留学生活に役立つ具体的なアドバイスをたくさん報告してくれました。

ウラジオストクで留学生サポートにあたっている連絡員フルスタリョーヴァ・クセーニアは、ウラジオストクでの新

型コロナの現状、規制、街の様子を報告しました。ウラジオストクでは現在、JIC から 11 名の留学生が渡航してロシア語を学んでおり、コロナに関連して留学生からよく相談が入って来る点についても言及しました。

その後、東京事務所の柳沢より、現在ロシア・ベラルーシに留学中の皆さんからアンケートで直接聞き取った現地の声を、まとめて紹介しました。授業は対面で行われているのか、授業のレベルは合っているのか、宿題は多いかなどロシア語の勉強に関することから、新型コロナの現地生活への影響、買い物や学生寮での生活、また実際に行ってみて感じたギャップなど、普段の留学相談時によく質問を受ける点を中心に、現に留学中の皆さんからのリアルな声をお伝えしました。

最後に、参加者からの質問時間をとりましたが、セミナー申込みの際にもたくさんの質問が寄せられていたので、それらも踏まえて質問に回答しました。また今回は、留学中の学生さん 2 名が途中からセミナーに特別参加してくださり、授業や生活のことなど、実際にその場で質問に答えていただきました。今まさに留学中の学生さんのお話は説得力があり、セミナーの価値をさらに高めてくれたと思います。

セミナーの詳細は次号でお届けします。お楽しみにお待ちください。「次はこんなテーマでロシア語留学セミナーがあると嬉しい」といった意見がありましたら是非 JIC までご連絡ください。(ロシア語留学チーム・リーダー)

日本語ボランティア教師募集！ キルギスの 11 年生学校「ピリムカナ・カント校」

キルギスで日本語教師をやってみませんか。
ビシケク郊外にある 11 年制学校で、日本語教師を募集しています。やる気のある人であれば、年齢、性別、学歴を問いません。給料は少なく、往復旅費も自己負担と、ほぼボランティアの条件ですが、教師経験を積み、ロシア語もしくはキルギス語を学習するよい機会になります。

<条件>

受入校；ピリムカナ・カント校（私立の 11 年制学校）

所在地；ビシケク郊外（バスで約 30 分）のカント市

授業数；1 授業 40 分×1 日 3 授業×週 5 日

給 料；月額 150 ドル

宿 舎；ホームステイ 2 食付、または学校の寮（1 人部屋/朝夕食は無料提供）

募集人数；1～2 名

期 間；22 年 9 月～23 年 6 月

*期間は希望により変更可

必要書類；履歴書、卒業証明書、日本語教師資格または教師経験のある方はその資料

締切り；2022 年 4 月末

問合先；JIC 東京事務所 TEL:03-3355-7294

e-mail: jictokyo@jic-web.co.jp

湘南ロシア倶楽部

遊び感覚でロシアを楽しみつくそう!

菅原 信夫 (湘南ロシア倶楽部 専務理事・事務局長)

JIC インフォメーション読者の皆さま、新年あけましておめでとうございます。

湘南ロシア倶楽部よりご挨拶を申し上げます。

何年も前の話です。冬の湘南の海を見たウラジオストクからの来客は、止めるのも聞かず、ざぶざぶと波打ち際から海に入ってゆきます。その後、感想を聞くと「この海が故郷と繋がっていると思うと、じっとしてはいられなかった。」改めて湘南がロシアと繋がっていると再認識した話でした。

そんな話に共感を覚える湘南在住のロシア好きが作った湘南ロシア倶楽部は、2019 年 4 月に一般社団法人登録を完了しました。代表理事には東京外国語大学名誉教授で葉山にお住まいの渡辺雅司先生をお迎えし、ロシアを楽しむ会がスタートしたのです。

渡辺雅司先生は倶楽部設立に際して、次のように述べておられます。

「ロシアは地理的に日本に最も近い国である。なのに、心理的には遠い国と思っている人が多い。シベリア抑留、北方領土問題が棘(とげ)のように刺さっていることは事実だろう。だが、その前に、われわれは隣国ロシア、ロシア人のことを知らなさすぎはしまいか?

明治以来ロシア文学、いや芸術全般が日本に与えた影響はかぎりなく大きい。またシベリア、極東地方には多くの日本人が移住していた。人的交流が今よりはるかに大きかったのだ。

また、鎌倉をはじめ湘南地域には、かつて多くの白系ロシア人が住み、パブロフ館のようなバレエ学校まで開かれ、多くのバレリーナを生んだ。これは海に面した湘南が、外来の文化に対して開かれ、文化の多様性の中にこそ自由を感じる精神風土を持っているからだろう。一方、戦後の「鎌倉アカデミア」に象徴されるように、国家の方針とは関係なく、住民が独自に文化を創造するという気概にあふれていたことも忘れてはならない。

日露関係が閉塞的な今、この湘南の文化想像力こそが日本とロシアの相互理解を深め、両国の文化の相乗作用を生むものと確信し、ここに湘南ロシア倶楽部を開くことにした。これは縦型の組織ではなく、ロシアに関心のある人たちが、いわば「遊び」感覚で集まり、お互いにアイデアを出し合い、幅広い、血の通った文化交流をはかるのが目的である。」



「かまくら国際交流フェスティバル」にて

渡辺先生の言葉のように、ロシアを遊びの対象とし、楽しみ尽くそう、そんなモットーを実現することで本当の意味で日露の相互理解は進むのではないかと、そう考えて倶楽部の最重要の事業をロシア訪問にしました。倶楽部の法人化前から実行しているロシア極東旅行はすでに 3 回を数えました。ウラジオストクやアルチョム市内でのロシア企業訪問から、ロシアでも話題になりつつあるパシフィック・ロシアンスタイルのグルメ体験、倶楽部の現地パートナーである極東連邦大学との共同イベントなど、一般の観光旅行では味わうことが難しいテーマに次々に挑戦、実現しています。



ウラジオストク市内のソ連ノスタルジー系レストラン訪問。

飲んで歌って、我々もソ連時代の日本人に還った一晩でした。

これは、倶楽部に学術系や芸術系の分野で活躍される方々だけでなく、商社やメーカー、サービス業などロシアで実際に仕事をされたビジネスマンが多いことも関係しています。本当にロシアを楽しむことができる倶楽部を目指して、湘南ロシア倶楽部の精神を湘南以外の地域にも広く紹介し、日本におけるユニークなロシアファンクラブとなるよう、本年は JIC 旅行センターとの連携も強化し、ポストコロナを目指して活動して参ります。

こんな湘南ロシア倶楽部の活動に参加されたい方は、お住まいの地域に関係なく倶楽部会員になっていただけます。ぜひ、倶楽部事務局へのご連絡をお待ちしております。

【湘南ロシア倶楽部 概要】

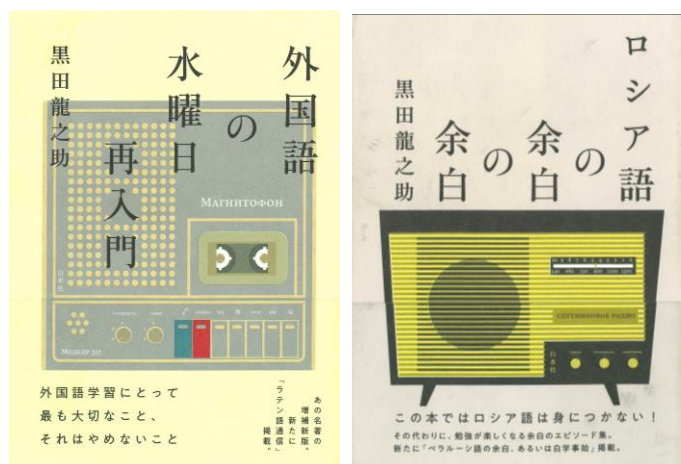
名 称：一般社団法人 湘南ロシア倶楽部

露語名：Клуб Русофилов Шонан (КЛШП)

連絡先：〒248-0005 神奈川県鎌倉市雪の下 4-2-10

E-mail：PEH01053@nifty.com TEL：090-3900-9312

《本の紹介》



黒田龍之助先生の2冊の本

岡本 健裕 (JIC 東京スタッフ)

黒田龍之助先生から弊社に、最新のご著書が2冊届きました。『外国語の水曜日再入門』と『ロシア語の余白の余白』というタイトルです。

「これは書評を書けということに違いない!」と前社長の伏田さんが言いだして、「うん、きっとそうでしょう」と思っていたら、どういうわけか私がそれを書くことになりました。みなさん、黒田先生のご著書をよろしくお願いします。

先生、失礼なことを書いていたらすみません。それでは連続2篇、謝意と敬意を込めて。

■書評1 『外国語の水曜日再入門』 黒田龍之助著 白水社、四六判 352 頁、2021 年 11 月、2500 円+税

これは 2000 年に現代書館から出た『外国語の水曜日—学習法としての言語学入門—』の増補版である。黒田先生がご自身でもおっしゃっている通り、先生の単行本の中では「もっとも広く読まれ、反響も大きかった作品」だから、ご存じの方も多だろう。すでに旧版を読んでいる人にとっては、この本の8割方の内容は既知である。

そう言われても、どこが増えたか全部読まないといけない、という心配は無用だ。この『外国語の水曜日再入門』には、おもしろい工夫がなされていて、新たに収録された箇所はページの色を変えてある。黒田先生の長年の読者は、淡いグレーの紙に印刷されたページを読めばいいわけだ。

もちろん、知っている本をもう一度読んでいけないということはなく、むしろ再読には常に新たな発見があるものだし、そもそも旧版を知らない新規の読者も大勢いるはずだ（実は私もそうだ）。なので、ちゃんと全編分のレビューをしよう。

黒田龍之助先生といえば、ロシア語の先生である。私が初めて黒田先生を知ったのは、テレビだった。NHK が夕方のゴールデンタイムに語学講座を流していた贅沢な時代、先生はそこでロシア語講師をされていた。私は子供の頃、偶然にそれを見て、「Здравствуйте」だけは覚えた。初めて私にロシア語を教えてくれたのは、黒田龍之助先生である。

でも、この本はロシア語の本ではない。タイトルの通り「外国語」の本なのだ。だからここには書ききれないほどたくさんの外国語が出てくる。イタリア語、韓国語、フィンランド語、トルコ語、チェコ語、聖書ギリシア語...、60 ページ強ある増補部分は何と全部ラテン語がテーマだ。もちろんちゃんとロシア語も出てきて、主役級の活躍をする。だが、あくまでも頻度の問題で、そこに軽重はない。どのページを開いても、著者の、あらゆる（たぶん、世の中全ての）外国語に対する並々ならぬ関心、そして努めて平等たらしめる姿勢が伝わってくる。厳密に言えば、対象を外国語と限定するのも適切ではないだろう。この本には、日本語も方言も含む、言語そのものへの深い愛が、全編を通じてみなぎっているからだ。

本書に登場する愛の対象はもう一つある。教え子たちだ。本編が執筆された当時、著者は理系の大学で教鞭をとっていたので、多くの理系の学生が登場する。つまり外国語は専門ではなく、ひょっとすると苦手な学生かもしれない学生たちだ。そんな彼らの中から、それぞれの意思で「黒田研究室」の扉を叩き、外国語に開眼し、かけがえのない一員となっていく者が何人も現れる。その過程が愛情とユーモアたっぷりに描かれている。

それにしても学生たちのなんと個性豊かなことだろう。きっと、黒田研究室がその個性をのびのびと発揮できる場所だということが、学生たちの間でよく知られているからこそ、慕ってくる者が後を絶たないのだろうと思う。学生はそういうアンテナの感度がいいものだから。

『外国語の水曜日再入門』は、外国語を媒介にして世界を解き明かそうとするエッセイである。著者は、学生に実験的な課題を与えては、彼らの独創的な回答をおもしろがり、ときに自ら初めての外国語と格闘しては、その経過を楽しげに報告する。増補部分の「ラテン語通信」は、新型コロナの影響をものに受けた 2020 年に書かれたばかりで、その新しさが非常にみずみずしい。

本書が読者に世界の仕組みを紐解いて見せようとするときには、「語学」と「言語学」の両方向からのアプローチがある。これを指摘しておくのは特に重要なことだと思う。

語学と言語学はどう違うか。を私が説明するのも分不相応だが、語学とは、具体的に「〇〇語」を理解し使えるようになるための学問で、つまり外国語学習そのものだ。一方、言語学とは、言語の構造や成り立ちを解き明かし、言語とはなにかを説明するための学問を指す。一言で言えば、語学は実

用のための訓練で、言語学はサイエンスなのだ。

本書の特筆すべきところは、その両方を心地よいバランスで巧みに組み合わせていることだ。だから読者は、初めは外国語学習の世界へと誘われるのだが、読み終わる頃には全員、言語学の入口に立っている。これはきっと著者のねらいなのだと思う。こんなに楽しい読み物でそんな難しいことを実現してしまったのは奇跡に近い。すごいことだ。

著者は幼少期のある出来事以来、自分は理科が苦手だ、嫌いだと本書内でしきりに訴えている。絶対にそんなはずはない。なぜなら、言語学の点でみれば、本書は間違いなく、珠玉の科学エッセイだからだ。

■書評2 『ロシア語の余白の余白』黒田龍之助著 白水社、四六判 365 頁、2021 年 11 月、2500 円＋税

これは 2010 年に現代書館から出た『ロシア語の余白』の改訂版である。章立てや配列が改められているものの、すでに旧版を読んでいる人にとっては、この本の 8 割方の内容は既知である。

もちろん、知っている文章をもう一度読んでいけないということはないし、むしろ再読には常に新たな発見があるものなので、ついさっき見たようなこの流れだって、読者はあたたかく受け入れてくれるはずだ。

黒田龍之助先生といえば、ロシア語の先生である。だから、この本はロシア語の本である。でも、学習参考書ではない。この本もやはり楽しいエッセイなので、読むのにロシア語の知識は不要だ。不要だけれど、もし、少しでもロシア語を知っていれば、確実にもっとこの本を楽しめる。

私が初めてこの本を手にとったとき、あまりにもスイスイ読めるので、すぐに読了するだろうと考えた。とんでもない間違いだった。だんだん辞書を引きたくなるのである。教科書を引っ張り出してみたくなるのである。さらに読み進めると、ロシア語の小説の原文を確認したくなるし、ソ連映画を見直してみたくなる。ちっともページが進まない。

そんなわけで、読み終わるまでに 1 ヶ月かかった。著者の軽妙な文体に騙されてはいけない。(実はまだ咀嚼しきれていない。この書評の締切りを大幅に超過してしまったからやむなく 2 周目を中断したのである。)

どうしてそんな本ができあがったのか、読んでみると察しがつく箇所がある。それはこんな記述から始まる。

「ロシア語の常識については Прохоров Ю. 編 Россия большой лингвострановедческий словарь を読みなさい」(325 ページ)。

本書内ではこの長いロシア語のタイトルしか指示されていないが、日本語にするとおおよそ『ロシア言語文化大辞典』(Y・プロホロフ編) くらいの意味になる。(以下、本稿では短く言語文化辞典と呼ぶ。)

著者はこの言語文化辞典に惚れ込んでいて、通読し、さら

に拾い読みを繰り返している。そのうえ、日本語に訳す価値があると絶賛している。

どんな辞典なのか。それは、ロシア人なら誰でも知ってることばかりを集めた辞典だ。見出しには、ロシアの一般的事物はもちろん、童話、小説、映画やその登場人物までが並んでいる。そしてその項目ごとに、慣用句や諺の用例を挙げたり、有名な台詞を抜かりなく引用、解説しているという。つまり「ロシア語の常識のかたまり」だ。

もし日本でこれをやったら、【ももたろう】とか【寅さん】みたいな見出しがあって、解説には「それを言っちゃあ、おしめえよ」が引用されているような感じか。そんな辞典があったら、おもしろいに決まっている。

本書『ロシア語の余白の余白』はこの言語文化辞典に似ている。もちろんエッセイなので、本格的な調べ物まではできない。でも、著者の言語文化辞典への想いが意識的に、あるいは無意識下で投影されていて、結果、読者の「読み方/使い方」はよく似てくる気がするのだ。

本書で想定されている読者は、ロシア語学習者と、ロシア語学習予定者の二種類だ。

この本をロシア語学習者が読むと、かつて通った道にはつとめる箇所がいくつもある。それで一旦ページを止めて、気になったことを調べ始めたりする。私がそうだった。

ロシア語学習予定者が読んだならば、高さすら判らない山に登る前に、途中の景色をちらりと見せてくれるような場面がたびたびある。いざ学習を始めたなら、頻繁にその情景に思い当たるだろう。そしてきっとまたこの本を開く。あとは学習者と同じ道だ。

だから本書は、エッセイなのだけど、リファレンスとしてずっと座右に置いておくのがいい。『ロシア語の余白の余白』はいずれ「ロシア語学習者の常識のかたまり」になりうと思う。

さて、以上のように本書はロシア語の本なのだが、追章として「ベラルーシ語の余白、あるいは白学事始」が巻末に収録されている。これも決しておまけと思わず刮目して読もう。ここでは、教科書すらない外国語をどう学ぶか、というところから始まる、本当の事始めに触れられるからである。(黒田先生の場合は、「どう教えるか」までその延長線上に見すえていたことだろう。)

ロシア語にも当然、こういう事始めはあった。それはゴンザとソウザだったり、大黒屋光太夫だったり、高田屋嘉兵衛だったり、少なくとも江戸時代まではさかのぼる話である。

これはそのベラルーシ語版、と紹介するとなんだか壮大な冒険活劇みたいだが、実際は全部で 20 ページ強の短い章だ。しかも存命の著者によって、現代文で記述されている。こんなに気軽に歴史の始まりに触れられるコンテンツはめったにない。それに何よりも、私達が同時代人として立ち会えることが痛快ではないか。

11月20日に大阪日ロ協会のオンライン講演会が開催されました。講師は奈良市内でロシア雑貨店を営む小我野明子さん。小我野さんが撮り溜めたたくさんの写真とともに「マトリョーシカとロシア雑貨の魅力」が紹介されました。マトリョーシカといっても工場生産のお土産用から作家の手になる芸術品までいろいろあること、ロシアとソ連時代のチョコレート包み紙のデザインからロシア社会の文化的空気を読み取れることなど、軽妙な語り口で楽しいお話を聞くことができました。以下、講演録を大阪日ロ協会と小我野さんの了解を得て掲載します。当日紹介された写真のごく一部しか掲載できないのが残念ですが、「小我野ワールド」の一端をお楽しみください。(編集部)

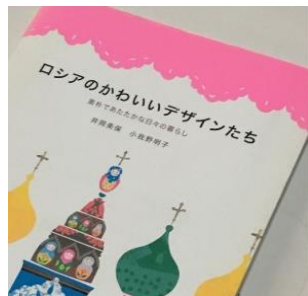
講演録 大阪日ロ協会オンライン講演会 11月20日

マトリョーシカとロシア雑貨の魅力

小我野 明子 (ロシア雑貨店マールイ・ミール)

自己紹介を兼ねて～ロシアにはまり込んだ私

私が初めてロシアに行ったのは2001年のことです。私はもともと出版社に勤めていて、その後フリーライターとして仕事を続けていました。本当に旅行が好きで、ちょっと時間ができるといういろんな国に行っていたんですが、当時ウラジオストク航空が関西空港に乗り入れてまして、友達と二人で何の気なしに「ウラジオストクに行ってみよか？」という感じで行ったのが初めてです。



その時に、ものすごく楽しくてロシアにはまってしまっていて、年に一回、二回とちょこちょこロシアに行くようになったんですね。そのうちに「ロシアのかわいいデザインたち」というロシアのパッケージデザインとか日用品、文具などのデザインをビジュアルで紹介する本を共著で出しました。そのほか、「おとぎの国、ロシアのかわいい本」というソビエト時代の絵本を紹介する本や、「ロシア暮らしの中のカワイイ民芸」というマトリョーシカやロシア雑貨を紹介する本も出しました。

かわいいロシア、素朴なロシアが好き

ロシア好きが嵩じて、フリーライターの仕事を続けながら、とうとう2011年に「マールイ・ミール」というお店を奈良に作りまして、ロシア雑貨を販売しております。ロシアに行って、気に入ったマトリョーシカや蚤の市などで見つけた面白いものを買集めては、お店に並べています。

私はロシア語が全くできなくて、初めて行ったときにはキリル文字さえわからなかったのですが、市場で並んでいる食品や商品で、中身が何かよくわからないんですけども、すごくカラフルでかわいいデザインのものが多くて感動しました。「こんなにカラフルで面白いパッケージデザインって、なんかロシアって素敵！」と思ったのが好きになったきっかけの一つです。商品の並べ方とかお店の雰囲気もすごくカラフルでかわいいと思って、ついついはまり込んでしまいました。今でもロシア語はできないままなんですが、ロシアの人が、ロシア語ができない私にすごく優しくしてくださるんですね。ふらふら～っと入って来て、店の中をジロジロ見て、何か訳の分からないことを言う私でも結構つきあってくれる。他の国だと胡散臭く見られて追い出されることもあるんですが、そういうロシア人の優しさがとっても好きで、深入りするようになりました。

初めてのモスクワでも大興奮

当時のウラジオストクはまだ観光化されてなくて、自家栽培の野菜を売っているようなおばちゃんたちがいたり、町の素朴な様子とか海辺で家族連れが遊んでいるようなところも、すごく楽しいなと思いました。

2006年に1冊目の本を出すことになった時に、それまではウラジオストクとハバロフスクしか行ったことがなかったんですね。「ロシアの極東しか知らんのに本を出すのはどうなん？」ということになって、友達とモスクワに初めて行きました。モスクワはもう大都会で「モスクワってすごい！」って圧倒されました。すごく沢山のものが溢れていて、蚤の市では古いものがいっぱい買えるし、ジェツキーミールという玩具や子供用品の専門店があって、本当におとぎの国みたいで大興奮したことを覚えています。

私のお気に入りのマトリョーシカたち

それでは本題のマトリョーシカの話をしていただきたいと思います。「ロシアのかわいいデザインたち」という最初の本を作った時に、ロシアのデザインと言えばマトリョーシカは外すことができないだろうという話になって、共著者の井岡美保さんと一緒にマトリョーシカ工場へ取材に行くことになりました。マトリョーシカ工場があるのはモスクワ郊外のセルギエフ・ポサードという町で、そこのおもちゃ工場を訪ねました。

セルギエフ・ポサードのマトリョーシカ工場



まずは木を削っている職人さんたち。施設自体が古くて、薄暗くてボロボロという感じだったのですが、作業場も無骨な雰囲気、そこであんなにかわいいマトリョーシカができるというそのギャップも面白いなと思いました。

削ったばかりの白木状態のマトリョーシカがころがっています。通訳さんを通じて説明してもらったのですが、木の素材は白樺か西洋菩提樹で、収縮しないように伐採後3年間乾かしてから木を削ります。ろくろを回して彫刻刀みたいなもので削るんですが、型があって抜いたりしているわけではなく、本当に職人さんがくるくると彫刻刀を木に当てて削っていました。

木工も絵付けも手作りで作られるマトリョーシカ



絵付けの作業は女性がほとんどで、木工は男性、絵付けは女性という分業になっていました。ここはおもちゃ工場なので、

たくさん作るためにテーブルの上に並べて、緑ばかり先に塗っていった、次に黄色ばかり塗ってというような段取りで効率よく作業を進めていました。作業しているテーブルの上には、子供さんとかお孫さんの写真が飾ってあったりして、そういう様子も楽しいなと思いました。

このおもちゃ工場ではセルギエフ・ポサードスタイルのマトリョーシカが作られています。ただし、週休2日とすると

週のうち4日はこの決まったスタイルで作って、1日は自分の好きなデザインで独自の作品を作ってもいいのだと言っていました。

マトリョーシカはかわいらしい笑顔の女の子というイメージなんですが、絵付けをしている方は、やっぱり自分の気持ちが楽しくないとかかわいいマトリョーシカにならない、嫌なことがあって機嫌が悪いと何だかわいくないマトリョーシカになってしまうと言っていて、なるほど人の手で作られて生まれるものなんだなと思いました。このおもちゃ工場に行ったことで、もうマトリョーシカが本当に大好きになりました。その良さを伝えていけたらと思って、お店で接客する時もそういう説明をしながらお客さんに選んでいただくようにしています。

マトリョーシカは伝統工芸品なのですが、やはり若い人が工場には来てくなくて、儲かる仕事や普通のオフィスワークに流れて行って、働き手の高齢化が進んでいます。

一個の芸術作品としてのマトリョーシカ

一方で、このような工場で作られるマトリョーシカとは別に、大学などで美術を勉強していたような人が、普段は違う仕事をしているのですが、日曜画家みたいな感じで自分の作品を作っていることがあります。写真は、そういう作家さんで、左側がマリア・ドミトリエヴァさん、右側が妹のエレーナさんです。

マリアさんはウッドバーニングというハンダゴてで焼きながら線を描く作品を作っていて、すごく優しい雰囲気の作



マリアさんとエレーナさん



エレーナさんの作品



マリアさんの作品



アレクセイさんの作品

風です。やっぱり工場で作るものとは全然違って、彼女

の独特のセンスと絵の上手さがあって、本当に世界で一つのすごい作品です。ちょっと値段は高いですが、絵画と同じで世界に一つのもので、芸術好きな人に人気があります。エレーナさんの作風も独特です。マリアさんの夫のアレクセイさんもマリアさんと同じ大学で美術を学んだ方で、彼は服飾関係の仕事をしているのですが、絵が上手ですごく凝った作品を作っています。



作者によって個性的なマトリョーシカ

上の写真はマリアさんの部屋です。こけしが沢山あります。マリアさんは何度か来日していて、マトリョーシカ愛好家にはよく知られているのですが、こけしに興味があって、知り合いがこけしを彼女にたくさんプレゼントしてくれたそうです。マリアさんの作品がこういう素朴な顔をしているのは、こけしに影響されてのことだと言ってました。



マリアさんとエレーナさんのお母さんアンナさんもマトリョーシカ作家です。おもちゃ工場のチーフデザイナーをしていた方で、彼女も絵がすごく上手です。これは、友達家の庭に咲いていた花をスケッチして描いたとのこと。仕上げはワックスです。普通のマトリョーシカはニスを使うのでピカピカしているのですが、彼女の作品はナチュラルな木の感じをそのまま生かすために、ニスではなくワックスを塗って仕上げられています。ワックス仕上げはマリアさん、エレーナさんも同じです。

別の作家さんも少し紹介します。(右段上の写真) 左はワレンチナ・ドロフエーエワさんという人の作品で、三角の形が特徴的です。彼女は博物館で働いていて民族衣装の研究者で



ワレンチナ・ドロフエーエワ作



ナジェージダ・イワンコワ作

す。左側の一番大きいのがオリョールの民族衣装、2つめがスモレンスクの民族衣装、3つめがトゥーラの民族衣装だということです。普通のマトリョーシカと違ってアンニュイな感じのする顔もとても個性的です。右はナジェージダ・イワンコワさんという方の作品。彼女もワックス仕上げで、優しい雰囲気に仕上がっているのと、目がぱっちりした感じが少女漫画っぽくてかわいいですね。



リュドミラ・フィリモノワ作



イリーナ・バトルシキナ作

左はリュドミラ・フィリモノワさんの作品ですが、彼女もすごく花を描くのが綺麗です。おなかの部分に猫を描いたり、ロシア民話のワンシーンを描いたりもしています。

ロシアの人気アニメのチェブラーシカを描いたマトリョーシカもあります。イリーナ・バトルシキナさんという方の作品で、今年はロシアでチェブラーシカが生まれて 55 周年な

んですが、その記念に作られたものです。

左はウジュキナ・リボワさんという方の作品で、彼女もウッドバーニングで描いていて、やはり筆で描いた作品とは違う独特の雰囲気があります。



ウジュキナ・リボワ作

本当に平和的なおもちゃだなと思います

「マールイ・ミール」はロシア雑貨の店ですが、やっぱりマトリョーシカが一番人気です。マトリョーシカってかわいらしいですから、ロシアのことに興味がなくても、ちょっとテレビで見たから欲しくなって、というようなことで店を訪ねて来てくれたりします。

マトリョーシカは発祥が知育玩具なんです。子供のために生み出された人形なので、ちっちゃい子はマトリョーシカを見たら必ず、触りたい、開けたいと言って、とびついてきます。実際にパカッと開けて中からマトリョーシカが出てくるとすごく喜びます。芸術作品のようなマトリョーシカを好む大人もいますし、子供から大人まで楽しめる人形です。ロシアを知らなくてもみんなが大好きという人形で、本当に平和的なおもちゃだなと私はいつも思っています。

様々なロシア雑貨の魅力

マトリョーシカ以外のロシア雑貨も紹介しておきます。
ベレスタ＝白樺の木で作った小物



ベレスタは、白樺の木を薄く切って作った小物です。左側がお土産として売られている小物入れで、右側は薄く切って編んだ靴です。こうやって靴を編めるぐらい白樺の木って柔らかいんですね。白樺の木で籠を作って、昔は食料を保存するのに使っていたと聞きました。

小物入れには動物や花などの模様が彫り込んであります。白樺の製品は北欧にもあって、北欧のものはシンプルな木の籠とかが多いのですが、ロシアのベレスタ製品にはいろんな模様が施されているのが特徴的です。そこがロシアっぽいなと私は思います。

ホフロマ＝木製漆器



ホフロマ塗りとは、木製の食器や家具に装飾をつけた伝統工芸品です。黒の地に金とか赤で絵付けがされていて、イチゴや木の実、植物が描かれることが多いです。すごく落ち着いた

雰囲気、実際に食器としても日常生活で使われています。うちの店に来てくださったお客さんで、「正月に黒豆を入れるのにちょうどいいわ」と言って買っていたのをよく覚えています。

同じ木製品なので、マトリョーシカと同じ工場で作られていたりもします。ロシアを代表する工芸品の一つとして、小さなスプーンなどが「ばらまきお土産」みたいな感じで土産物店で売られています。ちょっと部屋に飾るくらいだったらそれでいいと思いますが、食器としてはスープとか熱い料理なども入れたりできるので、実用で使おうとするなら、少し値段が高くては質の良いものを買った方がいいと思います。

グジェリ＝白地に青が特徴的な陶器



グジェリ焼きはご存知の方も多いと思います。白地に青の特徴的な絵付けがされた陶器です。家庭でごく普通にカップや皿などで使われています。

グジェリというのはモスクワ郊外の村の名前なのですが、グジェリ村とその周辺には大小いろいろな工場があり、個人で経営している窯元もあって、様々なスタイルの作品を見ることができます。私が訪れたのは村の中で一番大きい工場、ソ連時代は国営工場だったんですけれども、工場と言ってもやっぱり手作業がほとんどで、昔ながらのスタイルで成形や絵付けの作業をやっていました。

インペリアルポーセリン＝高級陶磁器



インペリアルポーセリンは、約280年前からサンクトペテルブルグで作られるようになった高級陶磁器とそのメーカーの名前です。帝政時代にはロシア皇

帝や貴族たち専用に食器や装飾品を作っていました。ソビエト時代はもちろん国営企業になっていたのですが（ロモノーソフポーセリンと名前を変えて存続）、今はインペリアルポーセリンという名前にもどって世界に売り出しています。高級品ですごく薄くて美しい器なんですけど、日本では洋食器はあまり流行っていないので、うちの店では値段が高いこともあってあまり扱っていません。

ロシアのかわいいデザイン

ソ連時代のチョコ包み紙を紹介する本



入ったら、ソビエト時代のチョコレートの包み紙コレクションが飾られていて、そのあまりにも素敵すぎる包み紙に大興奮してしまいました。「もうかわいい！」となって、写真を撮りまくったんですけども、ロシアのチョコレートの包み紙って、ずっと同じデザインが使われているものが多いんですね。

例えば、「アリョンカ」というブランドはソビエト時代から同じデザインで今も売られ続けられています。日本では次々と新しいフレーバーが出て、新しいデザインが出て、パッケージが入れ替わることが多い。パッケージというのは買ってもらうためのものなので、お客の気持ちを惹きつけるという意味で、資本主義経済の中ではそれが正しいんですね。でも、ロシアは共産主義でなくなって資本主義になったのに、相変わらずアリョンカはアリョンカの包み紙のままで、同じ味のチョコレートで、ということが私には逆にすごく羨ましいというか、素晴らしいことに思えたわけです。アリョンカは味も美味しいですし、そのレシピをプライド持ってずっと続けていくことと同じ包み紙をずっと続けていくことで、この包み紙のチョコレートはアリョンカの味だとみんなが知っている。日本のお菓子業界とはちょっと違う考え方をしているのがとっても面白くて、この博物館のコレクションのことはずっと気に留めてたんですが、ある時からその博物館が無くなってしまったんです。行こうと思って調べたら「閉館している」とホームページに書いてあって、すごくがっかりしました。

モスクワのパッケージデザイン博物館

それで、昨年春からのコロナです。ロシアに行けなくなって、悶々としながらインターネットで調べごととしてた時に、ふと「あの博物館はどうなったんやろ？」と思ってネットサーフィンしてみたら、包み紙博物館のコレクションについて

話変わりました、近々発行予定の私の本のことをちょっと紹介させていただきます。「ロシアのチョコレート包み紙〜ソ連時代のかわいいデザイン」という本です。

以前、モスクワで工業博物館を見学したことがあるんですが、そのすぐ隣にパッケージデザインの博物館がありました。ぷら〜っと

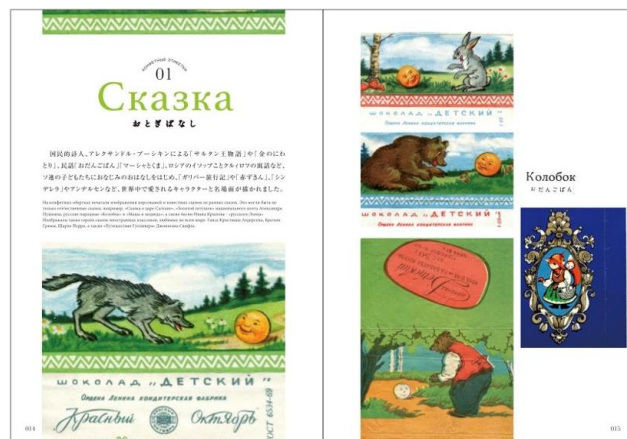
の記事を見つけました。私、ロシア語できないくせにグーグル翻訳を駆使して必死で内容を調べたんです。博物館は閉館になったのですが、展示コレクションは捨てられたわけではなくて、あるデザイン専門誌の編集部の倉庫に眠っているということが分かりました。

何とかその編集部と連絡をつけたいと思ってメールを送ったんですが、私のグーグル翻訳で作ったメール内容が怪しすぎたのか全く返信がこなくて、どうしようと思って、ロシア専門旅行社のJICさんに相談しました。JICのモスクワ事務所から編集部に連絡を取っていただいて、編集長のイーゴリ・スミレンヌイさんという方に「日本でこのコレクションを紹介したいんです」と提案すると、快諾してくださいまして、この本作りが動き始めたというわけです。

コロナ禍でロシアには行けないのですが、当初はネットだけで繋がって本が作れるから丁度いいやと思って取りかかりました。ロシアから画像を送ってもらって、文章も送ってもらって、私も家で書けるし、いろんな人に協力してもらって本作りを進めました。が、いよいよ進んでくると我慢できなくなって、私この6月にモスクワまで行ってきました。イーゴリ・スミレンヌイさんと一度も会わないまま本を作ることでもできたんですが、「やっぱり挨拶しておきたい」と思ったんですね。イーゴリさんに挨拶ができて、それからモスクワのチョコレート博物館にも取材に行き、やっぱり実際に行くことによってすごく知識も増えましたし、とても良い本になったと思います。

子供向けに考えたパッケージの数々

この本では、ロシアの包み紙をテーマごとに紹介しております。イーゴリさんはパッケージデザイン誌の編集長なんですが、個人的にもコレクター気質が凄くある人で、彼のコレクションからもソビエト時代のチョコレート包み紙の画像を400点くらい送ってもらいました。包み紙は本来捨てるものですから、結構シワくちゃだったりするんですけど、それもちょっと面白かったりします。



日本と感覚が違うなと思うのは、「一粒で2度おいしい」といったキャッチフレーズとか、人気アニメのキャラクターとかがあまり見当たらないことです。おとぎ話のパッケージ



が多くて、子供に昔話をしあげながらチョコレートを食べるというのも面白いなと思いました。ロシアの民話だけではなくて、アンデルセンの童話だったり、ガリバー旅行記だったり、やっぱり子供向けに考えたパッケージなんですね。

先ほど話したアリオンカというチョコレートは、ロシア革命で誕生したソビエト政権が「子供のために美味しくて栄養のあるチョコレートを作ろう」ということで生まれたチョコレートです。全国のお菓子工場にレシピを作らせて、一番優



いずれもアリオンカの包装



秀だったモスクワのクラスヌイ・アクチャーブリという工場のレシピが採用されました。そのレシピに基づいて各地の工場で作られたので、味は同じアリオンカのチョコレート

なんですけれども、当時は工場によっていろんな包み紙が誕生したそうです。随分違うパッケージもありますが、全部アリオンカと書いてあるので、同じ味のチョコレートです。

「朝のニュースは新聞で、夜のニュースはチョコレートで」

それから、ソビエトのお家芸というか、自慢はやっぱり宇宙開発ですね。チョコレートの包み紙にもロケットや宇宙飛行士が多く描かれています。これは博物館で聞いた話ですが、「朝のニュースは新聞で、夜のニュースはチョコレートで」と言われたそうで、政府が発信したいニュースをパッケージにいち早く採用するということがあったらしいです。例えば、ガガーリンが初めて有人宇宙飛行を成功させた時には、ガガーリンが出発して地球に戻ってきたら、すぐにチョコレートが売り出された。これはもう絶対成功するという前提でデザ

インが作られていたらしいです。

子供たちにとっても宇宙飛行士はスーパーヒーローだったと思うので、やっぱり自分のヒーローがチョコレートに乗っているというのはすごくコレクション魂を刺激したんじゃないかなと思います。



子供たちは包み紙を集める習慣があったらしくて、包み紙を使ってするゲームもあったらしいですね。どんなゲームなのかは説明を聞いてもよくわからなかったのですが、子供たちは包み紙を集めたり遊びに使ったりして、また動物の種類とか歴史的な出来事とかいった子供の知識になるようなパッケージもあったので、それで勉強に使ったりもしたそうです。

「カカオとチョコレートの歴史博物館」

モスクワに「カカオとチョコレートの歴史博物館」という立派な博物館がありまして、そこも取材しました。この博物館では、人類が初めてカカオ豆と出会った歴史やチョコレートがロシアに入ってから歴史を学ぶことができ、子供たちが遠足で見学に来たりもするのですが、パッケージデザインのコレクション展示ももちろんあって、とても参考になりました。

ローザ・エイネマ博物館というのにも行きました。カカオとチョコレートの歴史博物館の取材の次の日に、「こっちも言ってみたら？」ってイーゴリさんが紹介してくださったのです。ローザ・エイネマ博物館というのは、モスクワ川沿いにあったクラスヌイ・アクチャーブリ菓子工場の跡地が、カフェやレストラン、ギャラリーがある「おしゃれスポット」に生まれ変わっていて、その一角にできたクラスヌイ・アクチャーブリの歴史を紹介する博物館で、パッケージデザインもたくさん展示されていました。コレクションが多くて、それがすごく綺麗に保存されていて、パッケージ好き人間としてはものすごく楽しい空間でしたね。

写真(次頁)はイーゴリ・スミレンヌイさんとのツーショットです。その名も「アリオンカ」というチョコレートショップで撮った写真です。イーゴリさんは専門誌の編集長であり、コレクターでもあるすごい人です。イーゴリさんが書いてくださった文章のおかげで、ソビエト時代のパッケージの歴史とか社会背景がよくわかる本になったと思います。



「ロシアのチョコレート包み紙～ソ連時代のかawaiiデザイン」は、間もなく青幻舎という出版社から発売になります。チョコレート包み紙のコレクションを300点ほど掲載しています。私の博物館レポートやイーゴリさんの素晴らしい寄稿文も載せていますので、是非、手に取ってみてください。

＜質疑応答より＞

— マトリョーシカはロシアの人が日本の入れ子人形にヒントを得て作り出したと聞いていますが、…。

「ロシア 暮らしの中のかawaii民芸」という本を以前作った時に、マトリョーシカについていろいろ調べました。明治時代に箱根で売られていた七福神の入れ子人形をロシア人が持ち帰って、ロシア風にアレンジしてマトリョーシカが作られたという説があります。セルギエフ・ポサードにあるマトリョーシカ博物館の方にお話を伺ったのですが、
「箱根七福神由來說」はマトリョーシカの起源についてたくさんある所説のうちの一つということです。「イースターエッグ由來說」というのもあって、もともとロシアにあったものから作られたという説もあるし、証拠になるはっきりした文書が残っている訳ではないので、やっぱりよく分からないというのが本当のところですよ。

ただ、箱根の七福神がもとになったというのは有力な説の一つなので、マトリョーシカ博物館には箱根の入れ子人形が飾ってあったりもします。日本人としては箱根七福神がヒントになったと言われるとすごく嬉しいですし、日本とロシアの文化的繋がりを感じるエピソードでもありますね。

— マトリョーシカを買うとき、どういうのを選ぶといいですか？

マトリョーシカは、値段も様々ですし、デザインも様々なので、まずは予算があると思います。高くても良いものが欲しいという人もいれば、ちょっと部屋に飾るのに手ごろなものが欲しいという人もいます。本当にその人の好みなので一概には言えないのですが、うちの店で扱っているマトリョーシカは私がロシアで一個一個選んで買って来ているものなので、どれもかawaiiんですよ。その中で、好みとか値

段を考えて、欲しいものを買っていただけたらいいなと思っています。

— マトリョーシカのコンクールのようなものはありますか？

はい、あります。130年以上前にロシアでマトリョーシカが作られ始めたのがセルギエフ・ポサードという町です。モスクワからバスか電車で2時間くらいですが、ロシア正教の大きな修道院がある町で、マトリョーシカ工場があって、マトリョーシカ作家もたくさん住んでいます。この「おもちゃ博物館」が主催してコンクールを開催しています。マトリョーシカの作り手が減っているの、伝統文化を途切れさせないためにコンクールをやっていると聞きました。日本でもそうですが、伝統工芸は後継者不足に悩んでいるところが多いので、伝統文化を継承するためにもっといろいろな援助を増やしてもらえたらいいなと思います。

— チョコレートの包み紙ですが、同じ製品でも地方都市へ行くと、やはり違った包み紙があるのでしょうか？

今回の私の本に関しては、ソビエト時代の包み紙ばかりを集めたんですね。包み紙には帝政時代のものもあるし、現代ロシアのものもあるので、ソビエト時代のデザインに絞って今回は紹介しているのですが、ソビエト時代に関して言えばチョコレート工場はソ連各地にたくさんあって、それぞれいろんなデザインがあったようです。バルト三国のラトビアで作られたアリョンカのパッケージはラトビア語で書かれていたり、女の子の顔も違っていたりとか、中央集権的に「これを作れ！」というようなことはしてなかったみたいです。それが今どうなっているのかは、まだ十分に調べていないのでよく分かりません。

ちょっと厚かましいんですが、この本が売れたら、帝政時代のチョコレート包み紙とか、現代ロシアの包み紙とか、シリーズ本にできるのではないかと思います。

＜発売中！＞ 小我野明子さんの本 ロシアのチョコレート包み紙 ～ソ連時代のかawaiiデザイン～

講演で紹介された小我野さんの本が1月に出版されました。青幻舎刊、A5版160頁、定価：2200円＋税

「ソ連時代につくられた多くのチョコレートの包み紙が、今日も生き残り、使用されています。そして、そのほとんどが「ソ連スタイル」パッケージの名品となりました。

ソ連時代の産業グラフィックは、これまで完全な意味では、芸術として認められてきませんでした。包み紙はほとんどの場合、一度きりの使い捨てとしてゴミになりました。しかし、コレクターはチョコレートラベルの芸術的、文化的価値を理解していたのです。…」(本書より)

注文は、青幻舎へ → info@seigensha.com

10月31日、大阪の豊中市千里公民館にて「ドストエフスキー生誕200周年・ロシア文学と音楽のつどい」が開催されました。主催したのは「とよなか日ロ交流協会準備会」（代表；木村真・豊中市議会議員）。「つどい」では約70名の参加者を前に、京都産業大学の木寺律子先生が「ドストエフスキーと『カラマーゾフの兄弟』」と題して講演、ピアニストの小塩真愛さんがムソルグスキーの組曲「展覧会の絵」を演奏しました。

以下、木寺先生の講演録をとよなか日ロ交流協会準備会の了解を得て掲載させていただきます。（編集部）



講演録 ドストエフスキー生誕200年記念「ロシア文学と音楽のつどい」

ドストエフスキーと『カラマーゾフの兄弟』

木寺 律子（京都産業大学 准教授）

今年はドストエフスキーの生誕200周年記念です。200年前の1821年11月11日にフョードル・ドストエフスキーはモスクワで生まれました。ドストエフスキーは、19世紀後半のロシア社会を舞台に、人間のさまざまな精神を洞察し、宗教的あるいは哲学的な問題を提示した作家です。

ドストエフスキーというと一般的には暗くて重苦しい話、難解な作品を書いた作家というイメージを持った人が多いようです。確かにドストエフスキーの作品には、自殺したり、殺人を犯したりする人物がよく登場しますし、その中で社会問題を考えたり、宗教上の問題を考えたり、哲学的な問題を考えたりするわけですが、ただドストエフスキーを研究してきて思うのですが、ドストエフスキーというのは一般の人とかけ離れた突拍子もない作品を書いた作家ではないんですよ。むしろ多くの人が理解し共感できるような考え方や思想を提起した作家です。

1. ドストエフスキーの生涯

ドストエフスキーの生涯を簡単に紹介しておきます。従来ドストエフスキーの生涯は彼の作品と同じように重く暗いものだと考えられがちだったのですが、最近では「実はそうではなかった」という捉え方がかなり出てきています。

ドストエフスキーのフルネームは、フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキーです。ロシア人の名前は必ず父称＝お父さんの名前がつきます。フョードル・ミハイロヴィチというのは、「ミハイルの息子フョードル」ということですね。ミハイロヴィチというのが父称です。

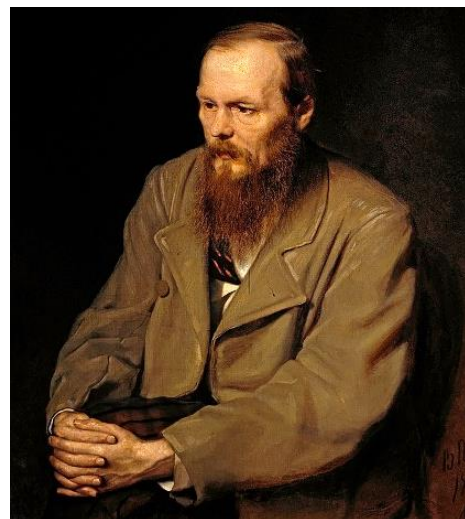
お父さんはミハイル・アンドレーエヴィチ・ドストエフスキ

ーと言います。貧民病院のお医者さんで、貴族といってもそれほど豊かではない、どちらかというと貧しい家の人でした。お母さんはマリアです。ドストエフスキーには6人の兄弟姉妹がいましたが、一番仲が良かったのは一つ上のお兄さんミハイルです。ミハイルが長男でフョードルは次男です。お兄さんとは一緒によく文学の話を語り合いました。

ドストエフスキーにまつわる様々な説

お父さんは「頑固で厳しかった」

「嫉妬深い性格だった」とたくさんの本に書かれています。これまではドストエフスキーの暗い性格とかその生涯に、この厳格な父親が影を落としたとよく言われてきました。しかし、最近では「そうでもなかったん



肖像画：ワシーリイ・ペロフ作 1872年

じゃあないか」とも言われています。昔の頑固な父親というのはよくある話で、昔ながらの家父長的な雰囲気のある家庭で育ったというのはその通りでしょうが、それ以上ではないという考え方ですね。以前は、父親は領地の農奴たちの恨みを買って殺害されたと言われていたのですが、これは最近言われなくなりました。農奴たちに殺されたというのが本当かどうか分からない。父親の死因は病死ではないかというのが最近

の説です。

さらに、ドストエフスキーは「てんかん」の病気があったということで有名です。作品の中にも「てんかん」の人物を多く描いています。『カラマーゾフの兄弟』でもスメルジャコフが「てんかん」の発作を起こす場面があります。発作が起こる前の独特の感覚をドストエフスキーは描いています。これをもとに、フロイトなど精神分析学者がいろいろな説を立てたので、文学評論においても大変長く影響力がありました。作家ドストエフスキーは頑固な父親の死を密かに望んでいたのではないか、それで父親が亡くなった時に自己懲罰的な意識が芽生えて発作を起こすようになったのではないかと、といった説がよく言われました。ところが最近では、ドストエフスキーは「てんかん」ではなくて、一種の脳貧血を起こしていただけないかというような説も出てきています。

有名な作家の生涯というのはいろいろなエピソードがよく知られていて、もう何も知られていないことがないかのように書かれているものですが、本当はどうだったのか、意外と分かっていることが多い。著名な人であろうと一般人であろうと、一人の人間の一生などというのは、そう他人には理解できるものではないと思います。

25歳で華々しく文壇にデビュー

ドストエフスキーはサンクトペテルブルグの工兵士官学校を卒業後、工兵局で勤務しますが、すぐに仕事を辞めて創作活動に取り組みます。25歳の時に『貧しき人々』(1846年)という作品を発表して、これが当時著名な評論家であったベリンスキーから絶賛される。華々しく文学の世界にデビューして、ツルゲーネフなどとも知り合うわけです。最初は良かったのですが、その後ずっとほかの作品も評価されるというわけにはいかないし、ツルゲーネフにちょっとからかわれたら本人は真に受けてひどく傷つき、みんなと仲たがいすることになります。

ドストエフスキーは同時代のいろいろな人と喧嘩したり仲たがいましたので、さぞかし気難しい性格だったんだろうと言われますが、昔から文学者というのは結構仲間と喧嘩したり、揉めたりしていますので、ドストエフスキーだけがそうだったわけではないのです。ツルゲーネフも同時代の人と相当喧嘩しています。

社会主義サークルに関わり死刑直前で減刑

ともあれ、こういった事情でドストエフスキーは文学者の仲間から離れて、ペトラシエフスキーのサークル(農奴制廃止や政治改革を訴える社会主義的な青年知識人の集まり)に出入りするようになります。ペトラシエフスキーの会は穏健な社会主義思想サークルに過ぎなかったという説もあれば、かなり本格的に革命思想を宣伝し実行しようとしていたという説もありますが、このグループの一人としてドストエフスキーは逮捕されます(1849年)。ペトロパブロフスク要塞に収監されて死刑判決を受け、刑場まで連れて行かれる。まさ

に死刑(銃殺刑)の直前にその執行が中止され、恩赦を受けてシベリア流刑に処せられるわけです。

この時一緒に逮捕された仲間の中には死刑直前の恐怖から気が狂ってしまった人もいましたが、ドストエフスキーは大変冷静でした。ドストエフスキーが凄いの、監獄の中でも小説の構想を練っていたことです。『小さな英雄』という作品の構想を練って、これはシベリア流刑後に出版されるのですが(1857年)、監獄の中で考えたにしては内容がとてもきれいで、のどかなお話です。贅沢な貴族の屋敷に住む主人公の少年の年上の女性に対する淡い恋心を描いた作品で、少年の初恋はほろ苦く終わってしまうのですが、そういうお話です。死刑という非常に厳しい現実から逃避していたと言えるまでですが、一面、ドストエフスキーの非常な精神的強さを感じさせるエピソードです。

最初の結婚と妻の死、兄の死

死刑を免れたドストエフスキーは、シベリアのオムスクで4年間の流刑生活を送ります。服役後はセミパラチンスクでの兵卒勤務を命じられ、そこで最初の妻マリアと出会って、クズネツクで結婚式を挙げます。妻マリア・ドミートリエヴナ・イサーエワは、イサーエフという人と結婚して子供がいたのですが、イサーエフが病気で亡くなって、その後ドストエフスキーと結婚するわけです。

こうしてドストエフスキーは1859年によりやく赦されて、家族とともにペテルブルグに帰還します。38歳の時でした。しかしその後マリアは結核のためペテルブルグで亡くなってしまいます。

1864年という年は、奥さんのマリアが亡くなり、その直後にそれまでずっと頼りにしていた兄のミハイルも病気で急逝する。ドストエフスキーにとってはこの1864年は大変厳しい年になります。

2番目の妻アンナの支えで五大長編を執筆

ドストエフスキーの恋人は数人いましたが、中でも有名な恋人はアポリナリーヤ・プロコフィエヴナ・スースロワです。アポリナリーヤは非常に情熱的な女性であったと言われています。彼女も小説を書いて雑誌に投稿したり、大学に聴講生として通ったりしていて、当時のロシアは女性の教育水準が上がり働く女性が増えて、女性の社会的地位が高まりつつあった時代です。アポリナリーヤ・スースロワも当時の新進的な女性だったわけです。

2番目の妻はアンナ・グリゴリーエヴナ・スニートキナです。アンナもそういった働く女性で、速記者でした。ドストエフスキーが『賭博者』(1866年)という作品を大急ぎで書かないといけない時に、アンナが雇われてドストエフスキーと知り合い、後に結婚します。アンナは実的な性格で、実務的にしっかりした賢い人だったので、結婚後は生活が安定していきます。ドストエフスキーはアンナに口述筆記して作品を書くようになり、いわゆる五大長編『罪と罰』(1866

年)、『白痴』(1868年)、『悪霊』(1971年)、『未成年』(1875年)、『カラマーゾフの兄弟』(1880年)といった作品が、妻であり速記者であるアンナとの協同作業によって次々と生み出されました。

一生お金の苦勞をしていたのは本当

先ほど『賭博者』という作品の名前を挙げましたが、ドストエフスキーは賭博癖があったということでも有名です。実際に賭博にのめり込んだ時期があったのですが、しかし生涯ずっと賭博をしていたわけではありません(註:のめり込んでいた時期は、最初の妻マリアを亡くす前後の2回のヨーロッパ旅行の間および、2番目の妻アンナとのヨーロッパ旅行の一時期のみ)。

ドストエフスキーは一生お金の苦勞をしていた。これは本当です。ドストエフスキーがお金の苦勞していたのは養わなければいけない家族が多かったからです。ドストエフスキーの最初の妻マリアにはイサーエフと結婚していた時の連れ子パーベルがいた。兄のミハイルも急に亡くなって妻と多くの子供たちを残した。マリアとミハイルの死後、ずっとその家族を養っていたのでお金がなかったわけです。

ドストエフスキーの作品を読むと細かいお金の話が多いですよ。お金の計算をしないと生きていけないという現実をよく考えて作品を書いている。実はドストエフスキー以前のロシアの作家は印税で暮らしてないのです。ドストエフスキーが印税で生活を立てた最初の作家のうちの一人です。トルストイとかツルゲーネフは地主貴族です。領地から上がる収入で生計を立てて、執筆活動はいわば趣味でした。ドストエフスキーの頃から印税に生活がかかっている作家も現れます。作品中にお金のエピソードが多いのはそういう事情を反映しているわけです。ドストエフスキーの手紙や個人的な私信などを読むと、お金の話を親戚や出版社の人としょっちゅうしています。小さな金額を送金するとか、送金してほしいとか、そういったことがよく書かれています。

ドストエフスキー研究の対象は作品そのもの

ドストエフスキーの生きた時代は、ニコライ一世(在位1825~55年)とアレクサンドル二世(在位1855~1881年)の時代です。ドストエフスキーは若いころは自由思想を抱いてペトラシェフスキー事件でシベリア流刑になりますが、その後はロシア正教に回帰して、また穏健な愛国主義ともいえるべき保守思想になります。皇帝に忠誠を誓い、ロシアの国家体制の中でのロシア正教会の思想に合致するような考えを述べるようになっていきます。

ドストエフスキーが亡くなる直前に、住んでいたアパートのすぐ近くで革命活動をしていたグループが摘発されました。その事件の後すぐにドストエフスキーが亡くなったので、これに関して憶測が絶えません。ドストエフスキーがこの活動に直接関わっていたという考えすぎですが、ドストエフスキーはその事件を聞いて若い時のことを思い出しショックを

受けて急に病気で倒れたのではないかと、関わってなくてもこのグループについて何か知っていたのではないかと、...、そういった考えがいろいろありますが、真相は分からないままです。

アンナ夫人は実務能力が高く、非常に立派なよい奥さんだったのですが、それだけに夫の死後もドストエフスキーにとって不利になるような情報をほとんど残していません。また、ドストエフスキーは日記を書いていない。ほかの作家のように、作家の本音や隠された事情がわかる資料がありません。したがって、ドストエフスキー研究というと、文学作品そのものをしっかり読み込んで作品で評価する。作品が一番大事なものとして研究されているわけです。

ロシア各地にある「ドストエフスキーの家博物館」

ちょっと話題を変えて、ロシア各地に「ドストエフスキーの家博物館」があります。ドストエフスキーゆかりの地やドストエフスキーが住んでいた家が博物館として保存されていますので、少し紹介します。



サンクトペテルブルグの「ドストエフスキーの家博物館」

まず、有名なのはサンクトペテルブルグの「ドストエフスキーの家博物館」です。実際にドストエフスキーが住んでいたアパートの一室が博物館として保存されています。ドストエフスキーというとペテルブルグの作家というイメージが強いのですが、モスクワにも住んでいたためモスクワにも「ドストエフスキーの家博物館」があります。

ドストエフスキーが晩年を過ごしたスターラヤ・ルッサにも「ドストエフスキーの家博物館」があります。スターラヤ・ルッサというのはモスクワとペテルブルグの間、古都ノヴゴロドの郊外にある小さな町です。ほかにも、モスクワ郊外のダロヴォーエや、セミパラチンスク、ノヴォクズネツクにも「ドストエフスキーの家博物館」があります。こういった博物館ではよくロシア内外の研究者を集めて、ドストエフスキーに関する学会が開催されています。

ペテルブルグもモスクワも町の中に博物館があるので観光で行くのは便利で簡単です。機会があれば是非見学してみてください。

2. 『カラマーゾフの兄弟』

ドストエフスキーの作品を読むと、登場人物の心理を非常に細かく描いています。ドストエフスキーというと何よりも自意識の問題を提起したことで知られているのですが、小説を読むと登場人物の心理が非常に細かく上手く表現されているので、読者も登場人物に共感しやすい。共感し、のめり込んで、その登場人物になりきってしまう。こうしたドストエフスキー文学特有の複雑な心理的葛藤の表現をドストエフシナ(достоевщина)と言いますが、しかしですね、ドストエフスキーは自分自身については小説に書いてないのです。どの国の作家でもよく自伝的な小説を書きます。トルストイなどは特に自伝的な作品をよく書いています。ところがドストエフスキーの作品には自伝的な要素がきわめて少ないのです。

最後の作品『カラマーゾフの兄弟』

今日は『カラマーゾフの兄弟』を中心に、ドストエフスキーの作品を紹介していきたいと思います。

『カラマーゾフの兄弟』は1879年から1880年にかけて書かれました。ドストエフスキーが最後に書いた長編小説です。ドストエフスキーはこの小説を書いた後、1881年に亡くなってしまう。『カラマーゾフの兄弟』はドストエフスキー文学の集大成という要素が非常に強い作品です。

粗筋を簡単にお話します。カラマーゾフの一家はロシアの田舎町に住んでいます。父親がフョードル・カラマーゾフ。三人の息子がいるのですが、久しぶりに集まって、修道院のゾシマ長老に同席してもらって、家族の話をするところから小説は始まります。息子たちは、長男のドミートリーは乱暴な性格で父親とお金の問題で揉めている。それだけではなく父親と一人の女性グルーシェンカを奪りあっている。次男のイワンは非常に知的な人物で学問をしている。三男のアリョーシャ(アレクセイ)は修道院の見習いで、信仰心の篤い純粋な青年です。

長男のドミートリーは父親と喧嘩中ですから、町中で父親が死んでもいいというようなことを言って回っている。実際にドミートリーは父親殺害をもくろんで、夜中に家の庭に入っていくのですが、結局は怖気づいて逃げ出します。ところが、逃げ出したはずなのに、父親が遺体で発見される。当然ドミートリーが疑われ、逮捕されて、裁判で有罪となります。この家に住む下男のスメルジャコフは実際にはフョードルの4人目の息子であるらしいのですが、スメルジャコフは実は自分が犯人だ、ドミートリーが逃げ出した後に自分が殺したと、次男のイワンに打ち明けます。しかし自分がそういうことをしたのは尊敬するイワンのためなんだと、イワンが望んでいることを自分はやったんだと言って、自殺してしまう。一方、イワンの方は、自分も密かにこういう事件が起こっても構わないと思っていた、自分が無意識のうちにスメル

ジャコフをそそのかしたのではないかと考えて、錯乱状態に陥る。……。これが大筋の話なのですが、その中でアリョーシャと町の子供たちの交流の場面があったり、イワンが書いた論文とか物語詩が紹介されたり、イワンが苦しみ悩んでいるところに夢の中で悪魔が現れたり、いろいろなエピソードが織り込まれます。小さな町で起こった父親殺害事件を通して、様々な問題が宗教的に、法律的に、哲学的に、各方面から考察されるのが作品の奥深いところで、大きな魅力になっています。

時代背景は農奴解放以後のロシア社会

時代背景との関連で考えると、この作品は1861年に行われた農奴解放以後のロシア社会を描いています。歴史上、農奴解放は有名ですが、この時代のロシアでは相次いでいろいろな改革が行われています。1864年には司法制度改革もなされました。『カラマーゾフの兄弟』は1879-80年に書かれたと言っても、小説の冒頭に「これは今から13年前に起こった出来事である」と書いてあるので、計算すると司法制度改革の数年後が舞台になっています。司法制度改革で弁護士とか陪審員の制度が整えられていく。しかも農奴解放の後なので、かつては身分ごとに裁判がされていたのが、みんな同じ法廷で裁かれるようになる。裁判が公開されるようになって新聞雑誌に裁判内容が報道される。それまでになかった状況が現れました。

『カラマーゾフの兄弟』は、小説の後半で裁判の場面が非常に長く続きます。弁護士が反対弁論で熱弁をふるう場面があったり、傍聴人たちがいろんな反応を示す様子が小説に描かれています。裁判で傍聴が認められたのも司法制度改革以後なので、当時としては最新の状況を描いていたわけです。

舞台となった田舎町のモデルはスターラヤ・ルッサ

小説の舞台はスコトプリゴネフスク(=家畜追い込み町)という架空のロシアの田舎町ですが、ドストエフスキーが晩年を過ごしたスターラヤ・ルッサの町がそのモデルであるとされています。

現在ではロシアのドストエフスキー研究者たちによって、『カラマーゾフの兄弟』の小説内部の世界と実際のスターラヤ・ルッサの町が詳細に比較検討されています。ドストエフスキーが住んでいた家が父親のフョードル・カラマーゾフの家で、庭にはバーニャ(お風呂)もあって、イワンとアリョーシャが会っておしゃべりしたレストランはこのあたりで、グルーシェンカはここに住んでいた、……という具合に、小説世界とスターラヤ・ルッサの現実の町が詳しく照らし合わせられています。

この町を訪問して、博物館の人の案内で町の中を見学できるのですが、いわば町全体が『カラマーゾフの兄弟』の作品世界に入り込んだテーマパークのようになっているわけです。

もっともキリスト教的な作品

『カラマーゾフの兄弟』という小説の特徴の一つは、ドス

トエフスキーの小説の中でもっともキリスト教的、もっともロシア正教的な作品であるということです。ソ連崩壊以降のロシアではキリスト教的なドストエフスキー研究が盛んになりましたが、彼の作品全部がキリスト教的だと言い切れるわけではありません。ただ、『カラマーゾフの兄弟』には修道院内部の事情や長老制のことなども詳しく書かれており、大変ロシア正教的な作品です。

小説の中で、三男のアリョーシャが、ゾシマ長老が語った話を一種の聖者伝(Житие/ジチエ)のような形式で書き残しています。この手記によると、ゾシマ長老は若いころお兄さんのマルケルを病気で亡くしている。ゾシマ長老は年老いてからアリョーシャにこの話をします。

「今日まで一度も私は彼にさえ、なぜこれほど私の心にとってこの若者の顔が愛おしいかを言ったことがない。今初めて言いましょう。彼の顔は私にとって前兆と予言のようだ。私の生涯の曙の日々に、私がまだ小さな子供だった頃、一人の兄があったが、わずか18歳で私の目の前で死んでしまった。……。皆さん、不思議なことに、アレクセイは顔がそれほど似ているわけではないが、精神的にとっても似ているように思えて、私は何度も彼をあの年若い兄だと思ったかしれない。…」(『カラマーゾフの兄弟』から)

ゾシマ長老が語る亡くなった兄マルケルの思い出

このようにゾシマ長老は、主人公の三男アリョーシャは昔亡くなった自分の兄マルケルを思い出させるような存在だと語ります。ゾシマ長老は小説の中でマルケルについてたくさん語っています。簡単に言うと、マルケルはもともと気難しい性格だった。神様など存在しないと信じていた。しかし病気が重くなってくると、信心深いお母さんを喜ばせようと自分も信仰があるように振舞うようになった。亡くなる前には次第に柔和な人柄に変わっていった。そして、周囲のものすべてに赦しを乞うようになった。窓の外に飛んできた小鳥にまで赦しを乞うた。……。「すべてに対して赦しを乞う」というのはキリスト教思想の重要な考えの一つです。マルケルは、最初は無神論的で神様を信じていなかったけれども、臨終の前には信仰心を獲得したと言えます。こうしたマルケルの姿は、弟であったゾシマ長老の信仰に大きな影響を与えました。

「すべてに対して赦しを乞う」という考え

アリョーシャはマルケルに似ていると言われた人物ですが、アリョーシャはゾシマ長老を大変尊敬していて、精神的な影響を強く受けている。アリョーシャはゾシマ長老を通じてマルケルからも影響を受けているということになるのですが、マルケルからアリョーシャに至る「すべてに対して赦しを乞う」という考えは、『カラマーゾフの兄弟』の作品全体を貫く深い宗教思想なのです。

「罪の連帯性」と言うのですが、キリスト教思想ではすべての人に罪があると考えます。その一方でお互いに赦し合うと

いうことで、よい関係が成立するというわけです。

『カラマーゾフの兄弟』は父親の死を巡って、兄弟たちから町の人々まで、みんなに罪の意識があるというふうに描かれる。みんなが罪の意識を共有する。その一方でゾシマ長老が話したような、お互いに赦しを乞うという考え方が同時に描かれていく。ゾシマ長老の「亡くなった兄の思い出」は、『カラマーゾフの兄弟』の宗教的要素を中心的に担っているエピソードなわけです。

「亡くなった兄の思い出」というエピソード

「亡くなった兄の思い出」というエピソードは、『カラマーゾフの兄弟』だけではなく、ドストエフスキーの他の作品にもいくつか描かれています。たとえば『悪霊』(1871年)、『おかしい男の夢』(1877年)にも似たようなエピソードがありますし、その他の作品にもあります。

ドストエフスキーの作品には自伝的要素が非常に少ないという話を先ほどしましたが、私は、この「亡くなった兄の思い出」というエピソードには、ドストエフスキーの亡くなった兄ミハイルが少しずつ形を変えて投影されていると思います。

ドストエフスキーと兄ミハイルは1歳違いの兄弟です。子供のころから兄のミハイルと文学の話をしていた、一緒に工兵学校に進学したよき相談相手でした。ドストエフスキーがシベリア流刑になったあとは、ミハイルから様々な形で精神的な援助や金銭的な援助を受けています。シベリアからペテルブルグにもどった後には、兄ミハイルとともに文学・政治評論雑誌の出版事業と一緒にやっていました。1864年に最初の妻マリアとミハイルを相次いで亡くし、ドストエフスキーは兄の借財や遺族の扶養を引き受けて苦勞をするわけですが、亡くなった兄の思い出がドストエフスキーのその後の生活や執筆活動に影響を与えていたことは間違いありません。そのことは妻アンナへの手紙や、ドストエフスキーが晩年に発行していた個人雑誌『作家の日記』からもうかがい知ることができます。

ドストエフスキーは兄ミハイルが亡くなった1964年の数年後から「亡くなった兄の思い出」というエピソードを少しずついろいろな作品に描き始めたのですが、作品の順を追うごとにこのテーマは発展しています。ドストエフスキーは自伝的な作品を書いていないし、周囲の人物でモデルとなるような登場人物もあまりいません。ごくわずかですが、例えば『罪と罰』のカテリーナ・マルメラードワは最初の妻マリアのイメージが投影しているとか、『カラマーゾフの兄弟』の三男アリョーシャは幼くして早世した息子のアレクセイを思わせるといったことが指摘されています。兄ミハイルについては作品との関連であまり指摘されていないので、今日は私なりに「兄ミハイルに注目するのもよいのではないか」ということを最後に提起させていただきました。(了)

ロシア伝統の味 12種類のハーブと蜂蜜のブレンド スピテン Sbiten <発売中>

スピテン(Sbiten)は、12種類のハーブと蜂蜜をブレンドしたロシアの伝統的シロップです。紅茶に少量混ぜれば即席ハーブティーが楽しめ、炭酸水、ホットワイン、アイスクリームやヨーグルト、サラダにかけてもおおいしくいただけます。JIC では、ロシア・エストニア国境近くに位置するプスコフ州ストルブシノ村で天然素材を使って作られた「ストルブシノ」スピテン・クラシック(250ml)を直輸入し、販売を開始しました。ロシア伝統の味をお楽しみください。

【お試しキャンペーン実施中！】20～30% OFF

商品名:《ストルブシノ》スピテン クラシック 250ml
定価: 1本 1,944 円税込み → 1555 円税込み (20%OFF!)
3本セットの購入なら 30%OFF → 1360 円税込み
(1セット 4080 円税込み)

配送料: 全国一律 550 円(北海道 770 円 沖縄 880 円)、
* 3 本以上購入の場合は送料無料

スピテンのご注文は JIC ショップで！

→ <https://jicshop.thebase.in/>

ジェーアイシー旅行センター「スピテン販売部」

ロシアのそばの実 (グレーチカ)

健康になる、キレイになる
定番のダイエット食！

“そばの実”で 健康生活
はじめませんか！

JIC ではロシアの伝統シロップ「スピテン」に続いて、ロシア産そばの実(グレーチカ)の販売を始めました。



「そばの実」は、高い栄養価と豊富な食物繊維に加え、ポリフェノール成分のルチンや、脂肪の吸収を抑制するレジスタントプロテインが豊富で、悪玉コレステロール値を下げ、ダイエットやアンチエイジング効果が期待できる健康食材です。世界トップクラスのバレエダンサーやフィギュアスケート選手を輩出しているロシアでは、「そばの実」が健康食品として愛されています。

Uvelka ウベルカ そばの実

1箱 400g (80g×4袋) 価格 ; 1250 円

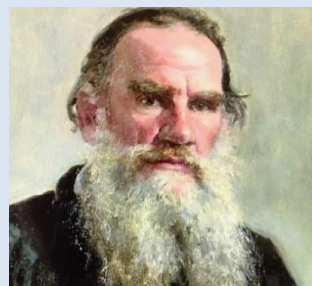
(送料込)

お求めは、JIC ショップで！

→ <https://jicshop.thebase.in/items/53213834>

発売中！

第3回ロシア文学読書感想文コンクール 「私のトルストイ」



世界に名だたるロシア文学は、若者たちに生きていくための知恵と勇気を与えてきました。NPO 法人ヘラルドの会は日本の若者たちにもっとロシア文学を読んでほしいと考え、第3回ロシア文学読書感想文コンクールを開催いたします。全国の中学生、高校生、大学生および23歳までの皆様のご応募をお待ちしています。

課題作品

感想文 ★中学生の部

レフ・トルストイ作『幼年時代』または『戦争と平和』

★高校生・大学生を含む23歳までの青年の部

レフ・トルストイ作『戦争と平和』または『復活』

評論 ★高校生・大学生を含む23歳までの青年の部

レフ・トルストイ作『戦争と平和』

応募期間：2022年8月12日～9月12日

表彰式：2022年12月 ※日程と会場は未定

主催：NPO 法人ヘラルドの会

協力：ロシア文化フェスティバル日本組織委員会

後援：ロシア連邦文化省／駐日ロシア連邦大使館

審査員(敬称略)

金沢美知子(審査委員長：日本トルストイ協会会長、東京大学名誉教授)、三浦正巳(日本トルストイ協会事務局長・理事)、木村敦夫(日本トルストイ協会理事、文芸評論家)、伊東一郎(早稲田大学名誉教授、ロシア文学者)、宮腰尊史(新潟放送取締役)、阿部昇吉(スラヴァ書房代表)、鈴木芳子(翻訳家、ドイツ文学者)

◆◆編集後記◆◆

▼昨年秋以降の日ロ交流情報が溜まっていたので、1月10日発行の「スタッフ新年あいさつ号」(第217号)に続き、臨時号を発行しました。本号は、二つの講演録(小我野明子さん、木寺律子さん)、JIC オンラインイベントの報告などを中心に編集しました。▼年明けから新規感染者数が急増し、コロナ「第6波」が始まりました。オミクロン株は、感染力は強いものの重症化率は低く、コロナウィルスの弱毒化が進んでいるように見受けられます。「第6波」が最後の波となり、終息の出口に近づくといわれていますが、今は3回目のワクチン接種や新しい飲み薬の効果を見守りつつ、基本的なコロナ対策を堅持するしかなさそうです。皆さん、くれぐれも元気にこの冬を乗り越えてください。(F)